

令和2年度浩志会本会員活動方針

「浩志会活動における不易流行～ハイブリッドの集い～」

代表幹事 総務省 原 昌 史

(はじめに)

令和2年は、私たちが当たり前に過ごしてきた日常と目にしてきた風景を一変させた。令和2年1月6日に中国武漢で原因不明の肺炎が確認されているとして、厚労省が注意喚起を行ったことを皮切りに、1月16日に国内で初の感染事例を公表、3月にはオリンピックの延期、4月には緊急事態宣言が全国に拡大された後、5月下旬に緊急事態宣言が解除されたものの、新型コロナウイルスを前提として、今なお、各人が感染拡大を予防する「新しい日常」を模索している。

今後も、当面は、公共交通機関内や会議室に限らず、日常の外出時においても、個人はマスクを着用する生活が前提となることが想定される。また、人が集まる場面においては、感染症予防策として打ち出された、「密閉、密集、密接」のいわゆる「3密」を避ける生活を基本に据えることとなるであろう。このため、人が本質的に楽しいと感じる、多くの人が集まり、コミュニケーションを取ること(特に、食事やアルコールを伴った場合)については、当分の間、一定の配慮が必要とされる。こうした困難を乗り越えていくためにも、新しいコミュニケーションの仕方が求められている。

(コロナ禍における活動の萌芽)

さて、浩志会活動についてである。従来より、参加者の熱い議論と親密な人間関係を基礎として発展してきた教養・人格の集合空間である浩志会では、その活動は3密であることを前提としていると言っても過言ではない。このため、3密を避けることと今までの活動スタンスとは一見すると二律背反する難問に思われる。

ただでさえ浅学非才の自分にとっては、この新型コロナウイルス禍における浩志会活動の最適方針が何かについては、にわかには明示することは難しそうである。

しかしながら、人間は困難に直面した時にこそ、必要性に迫られて新たな発想や対応方法を生み出してきている。例えば、ペスト禍においては、中世の従来の思想や生活への疑問が湧き起こり、人間の自由度や能力を解放し、より高めていく「ルネッサンス」の動きへとつながり、結果として、数学、文学、芸術をはじめ社会を豊かにする様々な発見・発明へとつながった。

21世紀の現在、テクノロジーを活用して、3密を回避しつつ、コミュニケーションを図ろうとすることは、時間や距離という従来の拘束条件を乗り越えるだけでなく、コミュニケーションの心理的負担も少なくするという点で、更に、人間の自由度や能力の解放につながっていくのかもしれない。

例えば、従来、活動に参加できなかった海外や地方に赴任された会員がリアルタイムで議論に参加し、現地の問題意識、海外から見た日本や地方から見た東京などの新しい議論が活性化されようとしている。

また、今までは、多忙で、会場にお越し頂くことが難しかった講師の講話の実現につながる可能性もあるし、はたまた、一度に多くの人数では実際に視察することが難しかった施設などの見学がバーチャルに実施される可能性もあるかもしれない。

更に、リモート参加により、途中時間だけの参加や久しぶりに活動をのぞいてみようという会員の参加に対して心理的なハードルを下げる効果や、他の参加者の目が気になりにくいといった環境が素朴な疑問や本質的な議論を誘発しやすい状況を作り出していくかもしれない。

既に、リアルと仮想空間をつなぐハイブリッドな浩志会活動も模索が始まっている。実際に、人数を絞って広い空間における3密を避けたリアルな集まりを実施することと、仮想空間における集まりをオンラインで統合することで、3密を避けつつ、浩志会活動の一体感を醸成しようという動きである。

今後も、新しい動きや取組を吸収して進化することで、活動の活性化につながる更なるハイブリッド化を推進していくことが必要であると考えている。

(浩志会活動における真髓)

コロナ禍という新たな課題を乗り越えて行くには、会員の参加の促進につながると思われることは結果をおそれずに積極的にチャレンジしていくことが重要である。こうした時にこそ、大局に立って、活動の進むべき方向性を明確に意識していれば、失敗をおそれる必要はないと考える。そこで、改めて、浩志会活動における真髓について考えてみたいと思う。

1 浩然の志

浩志会の名前の由来は「浩然の志の集い」とされ、「浩志」とは心などが大きく悠然としてしかも正しいこととされている。これを踏まえて、自分自身は、浩志会活動の意義について、こうした立派な心構えの大人の集まりと得心していた。今回、活動方針を考えるに際し、立派な心構えとは何だろうか、もう一歩深く考えてみる機会となった。そもそも、「浩然」の原典である「孟子」を開いてみると、この「浩然」の気はいつも正義と人道につれそって存在しているため、こうした心がけがないと萎んでしまうとの説明がなされている。

今まで分かった気になっていたが、社会が高度に発展し、価値観が複雑化・多様化すればするほど、この言葉をあてた先人の深い想いと人間への洞察力に居住まいを正さざるを得なくなるのである。

2 忘年の交わり、忘形の交わり

本会員活動の最大の魅力はなんと言っても会員の年齢の幅広さに感じる。このことは、民や官の垣根を超えた交流、各業界を超えた交流という視点に加え、世代を超えた交流が実際に日々繰り広げられていることに現れているのではないだろうか。こうした会員同士の交流の土壌が、議論の多様性と視点の深さへと昇華していると思われる。

また、普段は難しい顔をしている先輩が、仕事や役職を離れて、大変楽しそうに、今までの経験に立脚した深い見識を披瀝される場面もあり、形式張らない意見交換がなされることも本会員活動ならではのダイナミズムと言えるのではないだろうか。

上述のような交流を「忘年の交わり・忘形の交わり」という。安岡正篤先生の解説によると、文字どおり年を忘れることが「忘年」であり、後輩、先輩の年齢の差を超越して心と心のつきあいをするを「忘年の交わり」と言い、地位や身分を離れて交わることを「忘形の交わり」と言うとのこと。いずれも中国の逸話に残っており、歴史を超えて語りつがれる、人として本質的に魅力的に感じる行動なのだと思う。

こうした魅力を現代社会に恒常的に実現しようとしたのが浩志会活動の原点なのかもしれない。

ただし、安岡先生は、この表現の使い方に留意事項を付言されていて、「忘年の交わり」や「忘形の交わり」という言葉は年長者や目上の人を使うから奥ゆかしいとされている。この点、若輩者が使うことをお許し頂きたい。

3 複眼的な視点

浩志会を設立された上村健太郎先生は、世の中の事象を立場や所属組織の視点からミクロに捉えようとする動きに対して警鐘を鳴らされ、総合行政の必要性や総合的な判断がいかに重要かという問題意識をもっておられたことが御著書「憶い出の記」に記されている。

このような問題意識を踏まえて、浩志会の設立趣旨が作成されており、総合的な視点に立つためには、縦割りではなく、横の連携が大切であるとして、ご自身を「俺は団子の串になる」と評されていたとされる。

新型コロナウイルス禍により、将来が見通しにくく、激変する社会へと変化する混沌とした時期だからこそ、複眼的にものを見ることや、他分野の話から気づきを与えてくれる自己研鑽の道場としての魅力が増してきているのではないだろうか。

(今後の活動方針)

不易流行とは「不易を知らざれば基立ちがたく、流行を知らざれば風新たにならず」、すなわち、「いつまでも変化しない本質的なものを忘れず、また、新しく変化を取り入れていくこと」を意味すると解されている。

今期の活動については、歴史と伝統に裏打ちされた浩志会活動の本質を大切にしつつ、劇

的に変化する社会環境に対して、機敏に対応することが期待されていると考える。そこで、「不易流行」の浩志会活動を模索していくことが重要と考え、「浩志会活動における不易流行～ハイブリッドの集い～」を活動方針としてはどうかと考える。

もちろん、コロナ禍が収束して、人が集まり、議論し、酒を酌み交わすことのできる社会に戻ることが一番良いのかもしれない。しかしながら、「新しい日常」、言い替えると、場所という拘束条件から解放されたうえで人間関係が構築されることが普通におきる「新しく進化した日常」への扉をあける可能性にわくわくしてみても良いのではないだろうか。

私自身は、自らを会員の方々の気軽な相談窓口と位置づけ、新たな日常下において、会員の皆様方の抱かれる浩志会熱を最大限に発揮して頂けるような環境整備と、参加しやすい状況を作るためのご要望、潜在的なニーズをできる限り拾っていくことにより、コロナ禍における浩志会活動の活性化を模索して参りたいと考えている。

改めて、今年1年、副代表幹事の白井晶子さん(三菱商事)、宮腰奏子さん(厚生労働省)、本幹事団のみなさんと力を合わせ、汗をかいて、浩志会活動を盛り上げるべく、微力ながら尽力していきたい。一人でも多くの会員に活動にご参加頂き、満足感をもって頂けるよう努力しますので、何卒、ご指導を賜りたいと思っています。

以上、代表幹事の大役を仰せつかってから考えたことをつらつらと書かせて頂きました。駄文・長文でお目汚ししたことをお許し頂きたい。